

『筑紫日記』 翻刻及び語注 (上)

松原 輝美

井川 昌文

文庫蔵・『国語』50・51号に翻刻)の中に、この紀行の歌が載っていることから伺い知ることができる。高洲の好奇心に富んだ目で、各地の名所旧跡などを記述しており、文学的にも、歴史資料としても価値があるものと思われるので、ここに上下二回に別けて翻刻し、併せて若干の語注をつけて紹介したい。

二、『筑紫日記』について

香川県高松市の五色台にある瀬戸内海歴史民俗資料館の丸岡家文庫に、菊池高洲(一七四六～一八〇八)の著作が数多く蔵されている。

一、はじめに
板坂耀子氏の研究によると、近世の紀行文は相当な数にのぼるという。氏が紹介されているものだけでも六二二に及ぶ(「近世紀行文紹介」一～七『福岡教育大学紀要』・39ほか)。その内、九州へ旅行したものの四十七を別に紹介しておられる(「九州旅行小考」『語文研究』62号)。

今、ここに紹介する菊池高洲の『筑紫日記』は、それらの中に含まれておらず、全くの未紹介のものである。今までの高洲の著作紹介の中では『筑紫の苞』と言う書名で紹介されてきたために、その存在が確認できなかったものと思われる。これは、讃岐の丸亀から長崎までの紀行文である。残念ながら(上・往路)しか残っていない。(下・復路)があることは、『高洲歌集』(多和

一冊)残っている。縦二十四・二cm、横十六・九cmである。内容は次の通りである。友人の神崎寛濟(一七三九～一八〇三・讃岐引田の能書家)と共に、寛政十二(一八〇〇)年四月十六日に丸亀港を出発して、その年は閏の四月があったので、五月一日に帰りつくまでの四十五日間の紀行文である。主な見学地は、鞆(福山)・尾道・竹原・広島・壇浦・小倉・博多・太宰府・佐賀・長崎(閏四月七日到着)などである。丸亀から小倉までは船を利用し、有名な名所旧跡に下船して立ち寄っている。小倉から長崎までは、陸路(所謂、長崎街道)をとっている。(下)があったことは、『高洲歌集』にこの紀行に対応する歌が記載されてい

寛政十二年庚申卯月の初つかた、高松の城の下なる梶原玄恭（永言）「高勢屋平十郎」をとぶらひけるに、をりふし大内の郡引田の浦なる神崎寛濟（一）「始、茂太郎、又、惣三郎といふ能書の名有」来て予にいけひらく「むかしわが世の祥事（二）にあひし時、筑紫の太宰府なる天満神を心のりてしるしあり。其御恩頼（三）わすれがたく、年ごろまゐりて、そのかへりまをし（四）に（御社へまゐり）ぬさ奉らん志はありながら、うつせみの世事にか、づらひて今まで怠り侍り。今年はかならずはたしてんとおもふを、すがのねの（五）長路を、かしのみの（六）ひとりゆかんも心ほそくさぶしく（七）なん。汝は、年ごろの友にしあなれば、手携はりてゆかまほし。いかにいかにおもひたちてよ」とて、もよふさる。予もはやくより其志ありて、象山（八）の牧直（九）と契り置ければ、「直にも其よしきたらん」といふ。直は、寛濟臨池の徒（一〇）にて、殊にむつまじき人なりければ、それいとよきこと也とて、其よし直にいひやりければ、直も悦びてうけひきける。

かくて、予は十日に宿をたちて象山に至り、十一日、直と二人丸亀の城の下、筆の海（一一）の辺なる網屋「半兵衛」といふ家に至りやどる。寛濟は、九日引田を舟出し、十二日筆の海の湊につく。「引田浦より丸亀迄海上凡式拾里」ここに三人うち会て舟出せんとするに、直が家より、いさ、か事いできて竟に（一二）えゆかずなりぬ。其間かにかくしてもしもやとおもふ。

（ためらひける間に）、いざよひに日数へて十六日の朝四時（にて）纜（一三）をとく。船（も、か）のこも皆）は、寛濟が手船（一四）にて二十石ばかりつむべき小船也。鹿子（一五）三人「貞兵衛らにて」と共に五人也。「小船は、大洋にはあしけれど、地方をのるには、かけ引自由にして、あやふげなし。此度ふかく其利をさとりぬ。」

此日には、平らかにして（四方の海山見さけ（一六））舷た、きて、うたひつつ黄備（一七）の後の国なる鞆

〔語注〕

- (1) (一七三九〜一八〇三) 讃岐引田の人。能書家大の壺人。
 - (2) しょうじ。めでたいこと。
 - (3) おんらい。神や天皇からさずかる恩恵。
 - (4) 神仏へのお礼参り。
 - (5) 「長」にかかる枕詞。
 - (6) 「一人」にかかる枕詞。
 - (7) さびしく。
 - (8) 象頭山（琴平山）のこと。
 - (9) 牧匡直（一七四八〜一八二七）琴平の歌人・書家。
 - (10) りんちのと。手習いの友人。
- 四月十日〜十二日
- (11) 丸亀の海。
 - (12) つひに。結局。
- 四月十六日
- (13) ともづな。船尾の綱。

の浦にはつ。「筆の海より十四里。備後のくににて、福山侯の封地也。六万石也。」〔輛は、むかし息長帯姫の尊、から国を打たひらげ給ひて、御帰りの舟の輛、此浦にはてしより名づくとなり。〕「此説によらば、輛は、仮字にて輛也。『万葉』に「もののふの輛のうらわ」とよめるによらば、輛は借字にて輛也。万葉仮字を用ること常多ければ、輛を本字と定むべきにや」其地むかしより一都会にて富豪あり。福山侯の所領也。「むかしは、をの道よりは盛なりしが、近ごろ福山侯貧くなり給ひて、数々用金をめさるる故、今は衰たりとぞ。(大阪屋平藏といふもの保命)芳酒〔名をひさぐ〕といふ(名をひさぐ)酒、此の名物。たゞ利をえて天が下にきこゆ。其ひさぐ家、今大に富といへり。」

海岬山福善寺より、山海を望む。風景いとよし。むかし、朝鮮来聘使〔い〕とめでて、「日東第一形勝」〔南岡書〕といふ六大字を書す。今、額となして梁上に掲ぐ。「武云「安芸の宮島、丹後の天のはしだて、奥国の松島を古より「日本の三景」といひ伝へたり。今、韓客これを見ずして、「日東第一形勝」といへる、いとくおほつかなし。予、松しま・はし立はみねなども、宮島はみたり。宮島の風景これにおとるものかは。おもふに寺僧の乞にまかせて、みだりに書せしなるべし。」李東郭をはじめ詩文あり。印刻して寺にあるよし、こひもとめて帰らましものを、寛済も予も心づかずてくやくしくなん。後に遊ばん人もとめ帰て、予にしめし給へ」

から人もめでにしもの浦山の なみくならぬけしきをもみし
其景、向に山あり。海瀬其間に(ながれ)渾々たり〔偽山水のごとし〕故よに輛の泉水と
なんいふ。むかし、此地にいとたかき室の木ありしよし古歌に多くよめり。「『万葉』赤人」と
もの浦の磯のむろの木みる毎に相みし妹はわすられんやは。又、「古今」「たびねして月ばか
りこそとももの浦いそのむろのに明ぬものかは」今は、かれはて、処さへ知人なし。

(14) てぶね。自分の所有する船。

(15) かこ(水夫・水手)。船乗り。

(16) 遠くを見て。

(17) きび(吉備)。

(18) とも。船尾。

(19) 健胃薬などを含む地酒で、当時

全国的に有名であった。

(20) 売る。

(21) らいへいし。礼物を持って外国

から外交使節として訪ずれる

使。

(22) 正徳元年(一七一二)

朝鮮使・李邦彦の書

(23) こんこんたり。水の盛んに流れ

て尽きないさま。

(24) 「旅ねして」の歌は藤原信実の

『歌枕名寄』にある。

もの、ふのともものむろのきあととはんしるべもなみに袖ぬらしつつ
(其地の風流好古の人に、たづねとはしらるべきか。)

又人もめで私も床しともの浦 渚によする浦つ白波

又、さ、やきのはし(ここに)あるよし(かとききて)『名所方角抄』にみえたり。「くまの

なる音なし川にわたさはやさ、やきのはし忍びく」(たづねけれど、しれざりければ)いづ

くなりやととへど答る人なし。いとくちおしくて、

うつせみのよを忍ぶくこひわたる 我にはつげよささやきのはし

(神主五位上大宮紀行□□□□□□□□□□等年に支配すと也)

祇園社あり。いと大也。

まゐつる道の左に小松寺(といふ)有。小寺也。其庭に小松内府重盛公の手づからうゑ給ふといふなる松の木有。(いと神さびたり)

其隣、南林山円福寺「境内に俳人芭蕉塚あり。其塚に「うたがふる波の花にもうらの春」銘

云、「蕉翁為人 滑稽絶倫 卮言温故 鼓吹知新 千里負担 諸州師賓 問志経緒 花月此裡」

安永六年丁酉春二月」此銘不成語。可笑。

瑞雲山安国禅寺など(いふ)大なる寺有。

十七日朝に鞆を舟出し、西のかた一里半鹿島に至る。「賀島ともかく」其地、方一里ばかりの島也。地は備後なれど安芸の広島につく。(鳥崎といふ処にも天満宮別社有。備中・備後には

処々休み処といふあり。そこに神をまつる)そこに松本治兵衛門(先祖は和泉屋清方)といふ人

有。「父を三助といふ」其四世の祖をいふ。むかし此地(山)元(かぶろはげ)山にて、猪・

鹿さへすまざりけるを、始て樹木をうゑ、田畑などひらきし功によりて、広島侯別に其地を賜

②④ 遊女が往き交う人に声をかけた

②⑤ 遊女が往き交う人に声をかけた

②⑥ 連歌論書・宗祇著。

②⑦ しげん。とりとめのない言葉。

②⑧ いん。天帝をまつること。

②⑨ 融通無礙な言葉。

②⑩ かしま。松永港の入口。

②⑪ 四月十七日

②⑫ 頭に毛のないこと。

②⑬ 山に木をうゑ

②⑭ 鹿さへすまざりけるを

②⑮ 始て樹木をうゑ

②⑯ 田畑などひらきし功によりて

②⑰ 広島侯別に其地を賜

②⑱ 猪・鹿さへすまざりけるを

②⑲ 鹿さへすまざりけるを

②⑳ 始て樹木をうゑ

②㉑ 田畑などひらきし功によりて

②㉒ 広島侯別に其地を賜

ふ。よて其恵にめでて、候の為に館舎をたて、偽山水（偽山水をきづく）をきづく。其事とて景気とは、京師の伊藤東所（名は善韶、字は忠蔵、東涯先生子）瀧鶴台（字弥八、長門儒官）并に諸州の風人騷客の詩文につまびらか也。予、寛済と其事かねてきき及びしかば、舟よりあがりて、とぶらひければ、主人やがて出あひて、茶くはしなど出し、又、其詩文を印行せる小札二巻おくられ絵文をそへり。一首よみておくらばやとおもひけれど、舟人来て「潮かなひつ。はやくのれ」といふまに「かさねてまゐらすべし」といひて、たち出。「備後をのみち、いはしや徳左衛門方迄おこすべしといへり」

かしまより半里あまり阿伏兔（阿伏兔は、山の形、伏たる兔のごとくなれば名く）に至る。阿伏兔は、山の形、伏たる兔のごとくなれば名く。「磐石を高くつみ上て、其上に、一堂を構へ、観音の石像を安置す。此観音舟子ども追風をいふれば、しるしありといふ。いとあやしくて」天正のころ鞆の南、江の浦の漁、治郎左衛門といふもの日ごろ神仏を敬ひけるが、ある日あふとの沖にて網おろしけるに重くして引あげがたし、いとあやしくて、数多の人やとひて、やうく引上げるに、網の中に観音の石像あり。いとたふとくおもひて、其辺なる宝台寺主速智和尚にかたり、堂閣建立の志ありしを、当時の大守毛利輝元建立し給ひ海潮山磐台寺と（名く）。其後、水野氏この国を領し給ひける時、石僧房・撞櫓・石垣等を作り給ふと也。このあたり（其あたり）、奇石・怪巖多く唐画に似たり。「『入蜀記』に□□□けらく初天神あり。□□□にのれば、風を得て帰りつといへり」

あぶと神いかにかすらん西東 行きのおねのいのる追風を

又、其あたり、口なしの泊（口なしのとまりときけば身にしみてとひもやられぬものをこそおもへ）

千年の藤「『平家物語』「厳島御幸」の処に、備後のくにしきなのとまりにつかせ給ふ。此処

(31) 山水庭園。

(32) 伊藤東所（一七三〇～一八〇四）

東涯の三男。古義堂をつぐ。

(33) 瀧鶴台（一七〇九～一七七三）。

萩藩儒者・医者。

(34) ふうじんそうかく。詩人。

(35) あぶと。

(36) しゅうろう。釣鐘堂。

(37) 口なしの泊（しきなのとまり）。

阿伏兔の少し西にある港。

(38) 歌枕の歌集。有賀長伯著。

は、去ぬる応保のころ、一院御幸の時、国司藤原為直が作りける御所のありけるを、入道相国御もふけ⁽³⁹⁾にしつらはれたりしかども、上皇それへは御幸もならず。けふは卯月朔更衣といふことのあるぞかしと、おのく都のことをの給ひ出し、ながめやり給ふ程に、岸に色ふかき藤の、松がえに、さきか、りけるを、上皇観覧ありて、「あの花折につかはせ」とおふせ⁽⁴⁰⁾ければ、なからはらの安定はし舟に乗て、折ふし御前をこぎ通りけるをめして、をりにつかはす。藤の花を松の枝につけながら参らせければ、心ありなど仰せられ御感ありけり。「此花也。上の仕れ、おのく」とおふせ⁽⁴¹⁾られければ、たかすゑの大納言「千とせへん君がよはひも藤浪の松のえだにもか、りぬるか⁽⁴²⁾な」

矢のしま「むかし能登守範経八島より西国へ下り給ひし時、向の磯辺に旅寝しけるがふと目さめて、寢覚に此島をみるに、松がえに宿れる鶴を源氏の白旗とみまがひ、例の五人張に十五束の矢よつ引てはなせば、あやまたず、この島にたつ。今にし篠おひしげり、国の名所なる。それより矢の島の名有。向の磯をのと村といふ。此処の山よりみるを、横倉といふ谷に平家をまつれる宮四十余ありとなん。其下に平家の落人八日こもりたる所とて、八日谷といふ所もあり」などいふ所あり。みな古語なるよし『磐台寺の記』⁽⁴³⁾「備後の国、桑田某があらはす所、板になして寺にあり。絵図も有」にみゆ。

あふとより一里ばかり。尾の道に至る「をの道より西三里に三原といふ処あり。三はらより三里に仏通寺といふ寺あり。東破子湯の画ありといへり。みまほしきこと也」をの道も一都会也。
(向に娼家そこばく有)地は安芸侯(広島)の所領也。驚花とも浦にまされり。仏寺殊に壮麗也。「禅宗天寧寺・真言宗大宝山千光寺・法花宗本覚山妙宣寺・一向宗光明山福善寺・転法輪山浄土寺四宗兼宗など皆宏大也。良宮の社もよし。境内能舞台あり。祭礼九月朔日、当地の氏神

(39) 「まうけ」か。

(40) 「おほせ」か。

(42) 「みるに」か。

(43) 含笑舎桑田抱臍著。『吉備之後州阿伏兔磐台寺紀行』(天明七年刊)。

也」就中、大宝山（真言宗）千光寺は大宝山といふ高山の上にあり。奇巖怪石いと多き中に、庭前凡そ（高さ三丈ばかり）二十畝（かこみ）ばかりなる巖横はれり。（いつの頃にか）むかし朝鮮人（此沖を通り、岩に穴あることを見成し、つひにほり出す。其事あと岩上にあるよし）玉をほりえたりといふなる穴石上に有。本尊は観音像を安じ、卯辰に向へり。「備後三十三所巡礼所七番也」山海の眺望いとよし（書院より見渡せば、をの道一目に見わたす）筆墨に尽しがたし。

「丸亀より鞆三十り」。

九つ時舟にのり一里半にして、安芸の国の三原の浦に泊。「三原に城あり。安芸侯家人浅野甲斐の私城有。祿三万五千石、をの道より三里」日はくればたになり、あしの中物さびしきに、かもめのなくをさきて

草枕旅の衣をしりがほに 沖にも辺にもかもめ妻よぶ

十八日、三はらより七里、竹原といふ浦に泊「三はらより三里」

十九日、竹はらより三里、いはゆるおんど（隠戸）の瀬戸をとほり、周防の国葉島といふ処にとまる。おんどは両山の間にある。「おんどに広島侯御茶屋といふ所あり。土人、三代前の君広島侯、ここにて悪風にあひ給ひ、群臣しより今は此処こりて通り給はざり。それ今はなし。かがみのうらぞ然れる。御番所あり。其吏は其給に七いろ給ける。□色なども幾かりより書手をも給て来る。むかし遊女などをれりとか、今はかたく遊びし給ふ也」（よりくる故、むかしよりいとかしこき所とす）遠近よりみちくる潮、ここに束ねらるる故潮はやし。「いづら比瀬門といふは、此こと也」此日は、には平らかにして、さのみけはしくはやくもあらず。左の方に平相国平清盛を祭れる社あり。人家もかれこれあり。瀬門を過て、清盛のにらみ瀬といふあり。其事は、古史にみえたり。「むかし清盛殿島にまゐりて、帰るさ、こゝにて大浪打かゝり、舟あやふ

四月十八日・十九日

(44) 呉市警固屋町と倉橋島との間の瀬門。平清盛供養の五輪の宝篋印塔がある。

(45) 端島ともいう。柱島群島の一つ。

(46) 「死ぬるより」か。

(47) 「まうでて」か。

かりけるを、清盛打もほうで行きならみければ、いと平らかに成にけりといひつたふ（『平家物語』）⁴⁷ □□□□編入のおもしろし。にらみ瀬二里ばかり、

周防のくに葉島といふ処に至る。日は高けれど浅瀬あしければ、さて、葉島に至り、舟より上て、とある人の家に入てしばらく物かたりす。「ここは何れの領地にや」とひければ、主人云「ここは、長門侯の大臣岩国城主吉川和二郎君の所領也」と答ふ。先君は、いと奢給ひて⁴⁸聚斂⁴⁹く⁴⁹矢代島⁵⁰三万五千二百五十石の処に、竿で検地入、四万九千石余に打出され、百姓何れもうれなげきしに、当君（其君萩の君に申し給ひて）長門侯に御相談有て旧貫にかへし給（ひしかば、民等皆よろこびあへりと云ふ）へり。

其次「又、云、長門侯の祖君も不仁也。先君は、仁心ましましけれど、少し淫佚⁵¹にて、江戸吉はらの娼家に、遊ばれしに、小便所にて、やみ打にあひ給ふ。是は御旗本の中に、白川侯をうらむる人あり。長門侯を白川侯におもひあやまりしなりとぞ。公儀は病死と仰せ出らるといふ。白川侯は娼家にあそび給ふべき御身にも御行にもあらず、いとおもひあやまるべきにあらず。いとおほつかなければ、さけるまますを記す。長門侯其御領にてはすべて萩様といふ。吾君を高松様といふがごとし」

又云、七年以前、安芸と岩国と水の論争有。其故は兩國の境におで川⁵²といふ川有。其川水の争ひより兩國数千の軍兵を出しほとく合戦に及んとす。筑前侯、大臣を御使にて、御挨拶（あつかひ）有。江戸より上使として、御旗本篠元靱負殿、被来見分等致されしかど、いづれ是非ともわかちあへず。今にことすまずと也。徳山は毛利山城守長兵衛毛利五郎助いづれも萩の在番也（□里斗にして）長門の国室津⁵³に至る。室津は上の関と相むかへり。

二十日はしまより舟出し、九ツ時上の関につく。上ノ関向島に市井あり室津といふ。『大安

⁴⁷ 本件は西家と関門新地まじど入
⁴⁸ 四月二十四日・二十五日

⁴⁹ 小津田市本山半島南端

⁵⁰ 四月二十一日・二十三日

⁴⁸ おごり給ひて。

⁴⁹ 税をさびしく取りたてる。「聚斂（しゅうれん）く」は「あつめおさめて」か。

⁵⁰ 柳井市の対岸。大島諸島の主島。

⁵¹ いんいつ。みだらな遊びにふけること。

⁵² 小瀬川。広島山口両県の県境。

⁵³ 能毛半島南端。上関海峡をへだてて長島と対する天然の良港。

百首』長安長門の関すゑて「身のはてもゆかしかりけり今はただ過行ことしをとどめてしかな」。『万』十三、長門の浦「をとめらが桶にたれたるうみをなす長門の浦の潮なぎに」其間凡十三里。「予州の西の端と上の関と南北相あたれり」（其間わずかに十余町隔たり、いづれも市井あり。ただ上の関長門侯韓客饗応の館あり。むかし周南鶴台など、ここに冥加贈答せし所也けり）上の関の間屋（室津商人）に吉田嘉兵衛といふもの有。もと長崎の町年寄徳見茂四郎（につかへ）の手代にて（公）海鼠の（こと）御用をもて讚州（引田の浦）に來りし時、寛済が家にもやどり旧識なりければ、寛済に従て立よる。（ねもごろにせしかばとぶらひぬ。主人悦びて）酒肴出してもてなし、且、小倉より長崎迄の道程次第書つけくれたり。是は太宰府より長崎へ行んの志ありてとひし故也けり。

ややものがたりし、七ツ時に舟にのり、五里ばかり行て入、かむろといふ処に泊。『万』十五、周防まりふの浦「まかぢぬき舟しゆかずはみれどあかぬまりふの浦にやどりせましを」人家そこばくあり。藤の松にまとへる有。常よりも美なるを見て

藤浪の花の心のいかにして つれなき松にはひまとふらん

二十一日、早朝かむろを舟出し、八ツ時、新泊に着。凡十一里計。夜明けて見れば雨ふり風はげし。

二十二日、雨風やまず。同じ泊也。

二十三日、（朝、雨風、天晴ければ）新泊より六里（ばかりこぎ行しに、又、雨風ありければ）本山の内かりやといふ所に泊。ひるなれど雨ふり風はげしかりければ舟つかはず。

二十四日、雨はれたれど風やまずはげし。同じ泊也。

二十五日、天はる。早朝かりやを船出し、五六里余にして行ば、赤馬の関につく。「下の関

四月二十日

〔54〕室津あたりの海峡。下関（赤間関）に対していう。

四月二十一日〜二十三日

〔55〕小野田市本山半島南端。

四月二十四日〜二十五日

〔56〕本州最西端で関門海峡をはさん

右の廂に当時共に入水し給ふ諸公卿の画像あり。左には一谷・屋島・壇浦の戦を画く。皆名に高き土佐の筆也。「開帳料百銅也。古の名筆也」(右のかた内裡山あり。内裡山のこなたに内裡村あり。皆、安徳天皇の御事によりて名におひしなるべし。)高浜いと長き松原景気いとよし。永言云、「内裡、大里とかく皇居の意にはあらず。大閤秀吉公名護屋、御渡海の時真筆のえみす短冊「浪の花ちりにしあとをこととへばむかしながらにぬるる袖かな」境内「少し山の高さ処」帝と共に入水し給ふ平氏諸將の墓有。平氏將卒総墓・平資盛・平経盛・平教盛・平有盛・平範盛・平知盛・平二位尼・平忠房・平盛繼・平景俊・平景経・平忠光・平家長・其外入水の人々の墓数しれず。「大河内半助云、むかしは此諸墓、ここかしこにありしを、近きころ此所に集めしよし。阿みだ寺より五六丁小高き処に大閤御陣中の太鼓有。今は時をつくる鼓楼となれり」いと感慨ふかくて、始め、安徳帝を拜み奉て、かけまくもかしこけれど、涙流れて、わたつみの千尋の底に九重の都やあるとみことのりしかとなんまをし侍りしか。今又、諸將の墓のいと苔むせる(このつかいとど苔むせるを見て)月をめで花をかざして九重にうたひまはれしこともありしを九重を袖つらねつ、月をめで花をかざし、人のゆくへか月をめで花をかざし、人々のなりゆく末ぞ哀なりける

(此処のひらこぶ値安くて物よく、海水にひたしければはやく熟す。家づとによし)それより寛済と市中を廻り、名に高きあかまが関の硯買。そこばく買。(硯石は門司が関のあたりに出といふ)「西細江町に伊予屋久大三郎といふものあり。篆刻をよくす。吾讀山田郡阿辺良平銅印入の書状を達し、うけ取とり来る。暫くものかたらまくおもひ、主人もとめけれど舟の潮時後れんことを恐れて、やがてかへりぬ」赤馬が関今も魚うる女「さかなかへ」「さこかへ」とい

大(大)「アミ」

(61)「えみす」は不審。

の

「えみす」は不審。阿みだ寺の御陣中の太鼓有。今は時をつくる鼓楼となれり。阿みだ寺より五六丁小高き処に大閤御陣中の太鼓有。今は時をつくる鼓楼となれり。

(62) 天皇がおつしやる。

阿みだ寺の御陣中の太鼓有。今は時をつくる鼓楼となれり。

阿みだ寺の御陣中の太鼓有。今は時をつくる鼓楼となれり。

(63) みやげ。

(64) 篆書の文字を彫りつけたもの。

(65) 阿辺良平(一七七二〜一八二

一) 篆刻家。

出入むつかしき所也」他所舟来れば小倉の舟こかしこへの渡海はやらざる故也。寛済が船小倉にとめて、長崎より帰るをまたしむ。其間いたづらにをるは何ぞいはれあるやとうたがはれて、船役所よりかれこれいひしを、喜三郎かにかくとりなしけるよし。小倉の少し西に黒崎といふ処と申し三里の入海有。其入海に入て、黒崎より発足し、舟を黒島にとどむれば、何事もなかりけるものを、しらずてくやし。さりながらそれも何ぞさはりあるべし。や、おもはる。されどそれもゆるさぬことにや。)

二十六日雨そぼふる。長き旅路は雨さはり風さはりはずまじきなめりと、五ツ時小倉をたち十里(筑前のさかひのしるし碑あり。又、一里半にして)黒崎に至る。雨ますくふりしきりければ、長崎屋仁右衛門といへる逆旅にやどりぬ。「此時日は九ツにも至らざれども、長途のふみ出し、足そこなひてはいかゞとおもひはかりてぞやどる。是はだれも知たることなけれども、わかき人は血気にまかせて足のかぎりありきて後に、足いためてくゆること多し。始一兩日はたとへば十里のあしは、七八里にてやどりてよし」

二十七日朝六ツ半時、黒崎をたち、一里にして上原に至る。涼天神とするせる小社有。(天満宮をまつるなるべし。天神は天満宮也)。其側によき松有。(枝うち覆ひおもしろき松有。納涼によろし故名しなるべし)又、一里にして石坂に至る。又、一里にして古屋の瀬に至る。又、一里にして新田に至り、又、一里半にして永谷に至り、又、一里にして雀堂に至り、又、半里にして、赤間に至りやどる。「凡七里にして、此間名所古跡ありやなしや『風土記』もたざればしりがたし。下同じ」

二十八日(朝に赤間をたつ)。赤間の町はづれ十丁ばかりにして小川あり。石橋をわたせり。橋を渡れば春町「赤間より一里半」畦町「春町より一里」檀原「あぜ町より一り」青柳「檀原よ

四月二十六日

四月二十七日

(70) 「名く」か。

四月二十八日

り一里。青柳のこなたに御蔭松といふあり。神功皇后立より給ひし松のよし」筵打村「青柳より半里。此道側、太閤の水くみ給ふ半遅水（ハヤシ）といふ有」芸山「筵打村より一里」をへて浜男（ハヤシ）に至る。「俗、はもふのことと唱ふ。芸山より半里」橋のこなたより右にとり川堤をつたひ行は、田島・宗像・通夜磯など過て浜男に至る。「本道ならねば道はあしく」わが輩、宗像の神社（ハヤシ）にまゐてまくほりするから、川堤をつたひ行こと凡一里半ばかり、橋をわたりて、半里、宗像郡田島に至る。田島に田島明神の社有。山上に在、山下に神御水の井あり。石垣をめぐらし側に石碑あり。（天の真名井とするせり。いはれあることにや）石碑は漢文にて、（碑ありとも、もとよしはしらず、ただ）此井不浄のものあらふべからざる定を記せり。近ごろにたてたるもの也。

「田島の神のこと『古事記伝』第七・六十三枚にみえたり」

又、行こと一里半ばかり行けば、身形（むなかた）「『筑前風土記』に宗像大神、自天鋒居崎門山之時、以青藥玉置奥津宮之表、以八咫紫藥玉置中津宮之表、以八咫鏡置辺津宮之表、以此三表成神体之形、納置三宮即隱之因曰身形郡後人改曰宗像」の辺津宮に至る。（其所海にぞあり。此地昔は、神湊といふと也）辺津宮は瀛宮中宮にむかへる名也。祭る神、田寸津比賣命也。「社説市杵島姫命」瀛宮（ハヤシ）は（神湊より）北の海四十余里にあり。澳つ島にあり。「島のめぐり一里、人家なし、社は西南向、安置す」祭る神、多紀理比売命「『書紀』曰市杵島命是船于遠瀛者也。いつく島の縁起に此文を引るは些か強なりし」中つ宮は神湊より三里北の海中にあり。祭る神市杵島姫命「『紀』に田心姫尊。以上『古事記』によりて記す。「日本紀」杜家の説くさくたがひ有。『古事伝』（卷六十三）につまびらか也。下曰「此三柱の神は、天照大御神すさのをの尊と御うけひの時、生ませる御神たちにて、いとまたふとき大神なれど、今は神垣もや、ほころびてよの常宮に異ならず。「されど宮のさま拝殿、又、神楽処など古の大社のかたみあり」大

（神土）

(71) 「半道水」か。「半道水」は「飯銅水」のこと。豊臣秀吉が飲んだ水。

(72) 辺津宮（田島）・中津宮（大島）・沖津宮（沖の島）の三宮で一社を組織する。天照大神が素盞鳴命との誓約の時生まれた神、田心姫・湍津姫・市杵島姫を祭る。

(73) 「まうで」か。

(74) えいみや。ゆつたりとした海の宮。

宮司の家も「古事記」にはゆる胸形の君等の裔也といへり」わら屋ぶきにて、築塙もくづれたり。建武のころ尊氏將軍筑紫へ落給ひし時、此宮に奉られし甲冑ありとき、て、大宮司にこひみたり。冑は星かぶとにして、吹かへし甚小し。甲は上は白糸下は黒糸にて緘せり。其制今のよろひと異也。左右の脇の前に一條のくさずり(76)のごとき（ながき）ものをつけて、其あきたる処を補ふやうにしたり。「高松舟与力松本氏がもたる太閤秀吉公より拝領の鎧は、せなかに前に一條のくさずりのごとく長きものをつけて、其ひまを補ひ、其上にあげまきをほどせり。今此よろひは左右のわきにてしたれば、背とわきとのたがひあり。何れも今の銅丸とは異なり」

三條宗近作の劍。長さ壹尺七八寸、直焼刃也「金色花、はば壹寸弱、厚さ貳厘弱」心はナカかくの如し。銘はあれどもみえがたし。鞘いと古き物也。金色いかにも千年の物とみゆ。尊氏公の佩刀はさびて（いづれもさびて）あやもわかれず。其外三四刀みたれども鑑識よしともあしともいひがたし。古さまに画ける三十六家歌仙の像も有。殊勝にみゆ。さても社の前左の方に（一間計の）小堂あり。中を二区にわかち表には阿弥陀仏を安じ、裏には阿弥陀經文ほり付たる石碑有り。むかし小松内府重盛公もろこしイハフ山へ三千両つかはし(77)、冥福をいのられし時に、もろこしより此碑をおこしけるに、其舟此浦を過ける時、平氏の一門悉く壇浦にほろびぬとき、て、今は誰にかかへりごとまをさんとて（此浦に）なげすてける。其後はるか年月へて、白砂の中よりほりいでみいだしけると也。ここに置（けること）と也。其石堅三尺ばかり、横壹尺四五寸ばかり、其書甚古雅也。それを唐紙に打たるを寛済求得て（携へ）もちかへれり。「金子百疋也」

九ツ時過るころ宗像をたちて通夜崎に至る。其間わづかに二里余なれど、山路いとけはしくかつ雨ふりて（しきければ）道ひぢり(78)になりしかば、いづれもなづみ(79)くるしめり。七ツ時やう

(75) つきがき。土塙。

(76) 胴の下に垂れて大腿部を守るもの。

(77) 『平家物語』卷三に平重盛が宋へ三千両寄付して、内千両を育

王山へ寄付した話がある。

(78) 泥土。

く通夜崎に至り、「市井あり」とある漁家にやどる。「宗像田島より通夜崎へ至る。其田地土色あかくして瘠地也」(はけ道といふ処二つあり。今はもはら香椎の浦なるをいへど)人家少なくて皆春田也。(漁家の主、年老て)主人云、むかしは(あたりは)海ふかく入りこみて、此辺り独り海へ突出たり。(中道といふといへり、よめりとなん)故に古歌に海中道とよめりと也。「筑前名寄」⁽⁸⁰⁾にも此説あり。今のいはゆる海の中道は是より誠なるべし。未知孰是。何か真ならん同しらず」(主人、又云、某の処)柳の宿といへる処あり。(香椎のうらにはあらずといへり)古の往来の駅也。今はただ一本の柳たてり。邦守古のかたみ也とて、標してきらざらしむといへり。「主人云、こゝを通夜崎としもいへるは、むかしもろこしよりただよひ来れる薬師仏あり。沖の島にいつき祭り、ここにてもろ人通夜する故名くと也」(此によもすがらいねがてにて、寝いるさ、のみしらみにはれて、えねざりけり。

(狂歌)よもすがらのみにはれてつやさきの 東しらみをまちかねてゆく
こと凡一里半、前夜のくるしさをおもひ出て、

枕よりあとよりのみのせめくれば、東しらみをまちかねて行

二十八日朝に通夜崎をたつ。(つとめてといひしかども、この朝前夜のくるしさを打わびて)町はづれより海浜をゆく。海は青く沙は白く、墨そ、ぎたる如き松原ながくと打はへたり。ここは何といふ所ぞととひければ、ふくまといふ(所なり)といへりければ

澳つ風ふくまの海の磯馴松 幾よなれんしほらしくみゆ

(となん口ずさみつつ行)。海浜を行こと一里半ばかり、又、野に出、山をめぐり、又、浜つたふこと凡三里半ばかりして、浜男といふ所に至る。(甲塚冢といふ所あり)浜生のこなたに、神功皇后から国より(うちひけ)帰り給ふ時、甲を蔵め給ふといふなる冢坂甲坂など有。

(79) 苦勞する。

(80) 開墾したての田。

(81) 地誌。貝原益軒著(元禄四年

刊)。

(82) 『福岡県地理全誌』の中に「柳宿址」の記述あり。今の津屋崎町役場付近。

(83) この日付は、二十八日(朝に赤

間をたつ)の前条と重複して不審。

(84) 浜生。

(85) 『筑前国続風土記』(貝原益軒

(堀に甲冑を埋め給ふ所也とぞ)。又、馘を埋め給ふ(所なりとぞ)。「道の右の小岡也。浜生に近き処」といふなる耳塚あり(半里計、道の左に耳塚といふあり)。此所の海古歌にはゆる香椎の浦也。「耳塚より程なく浜男に至る。浜男は古のいはゆる香椎の浦にて、今は只、長浜となれり」。「万葉集」第六に帥大伴卿「いさやこら香椎のかたに白妙の袖さへぬれて朝菜つみてん」・大弐小野老朝臣「時つ風ふくべくなりぬ香しめかた潮干のきはに玉藻かりてな」・『続古今』家持卿「船出する沖つしほさひししろ妙のかしみのわたり波たかくみゆ」浜男の市井のある処も古は海にてありしにや」鹿の島、海の中身のつゞき也。国忠「弓はりの月のいるにも驚かてつれなくたてる鹿の島哉」此浦より打みれば、はるかに海上に突出たる松原有。凡一里半計あるらん。是いはゆる海の中道也。「夫木集」「秋のよの潮ひの月のかつらがた山までつづく海の中道」「とあるをさるべきことにこそ、其浜のけしきいとよろしと見れば、其あたり島山のけしきいとよし」丹後の天のはし立にたとへり。

塩土の翁教へしわたつみの うまし小浜はここにやあらぬ
 それより左の方十余丁計いく。糟屋郡香椎の宮に参る。香椎の宮は神功皇后を祭る。「仲哀天皇の廟とも、神功皇后の廟ともいふ。御社は少し高き処にあり。高大ならねど其たてかたも尋常にかはりて殊勝におほゆ」社前石階の下にはゆる文杉あり。「日本紀」第八卷檀日宮云々。又、社頭あや杉などおもひ合すれば、仲哀の廟なるべし。資綱の説よろしかるべし。「古今集」無名「千はやぶる香しみの宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり」むかし仲哀天皇「足仲彦天皇」熊襲をうち給ひ(流れ矢にあたりて)ここにて神さりましたし。其御棺をかけ給ふ木也となんいひ伝ふ。誠にいと大なる木也。中は皆空になりたれどいまだかれず。神代のものとおほゆ。石柵をめぐらして人のふれんことをいましむ。「日本紀」卷之八「仲哀紀」云「八

(86) 著)にその記述がある。

(86) 「うちひけ」は不審。

(87) 「馘塚」とも言う。甲塚冑塚

耳塚の三つは、J R香椎駅の北側に現在も地名として残っている。

(88) 満ち潮の時の波の音。

(89) 神武天皇が東征の時、海上の案内をした老人。

(90) 仲哀天皇と神功皇后をまつる。

(91) 神功皇后が三韓征伐の帰途、剣

・銚・杖を埋め、目印に杉の小枝をさしたのが根づいたもの。

(92) 「御衣木」で、ご神体を作る神木。

(93) 「千はやぶる」の歌は「古今

年春正月、幸筑紫居櫛日宮云々。擊熊襲不勝。九年春二月丁未天皇有病身而明日崩云々。皇后詔武内宿祢竊収天皇之屍從海路遷穴門、而殯于豊浦宮云々。穴門は長門也。」其(左のかた)こなたに社祠・社僧とおほしくて、左の方に並たてり「いづれも微々也」案内して、其あたりの故事をとひしかど、しかくとしれず。某処は、皇后三韓御征伐(からくにうち給)の時の評定所也。某処は、皇后御髪をとき洗給ひし処などいひしかど、待人あれば(心せくことのあるかて⁹⁴)くはしくもたずねあへず。後に遊ばん人つばらにたづねてきかせ給へ。「『紀』云「皇后還詣櫛日浦翁髮臨海曰吾被神祇之教頼呈祖之靈浮涉滄海躬欲西征是以命頭滌海水若有驗者髮自分為兩即入海洗之髮自分也。皇后便結分髮而為髻卒」

香椎より一里ばかりして、いと広き道に出、右ははかた、左は箱さき八幡宮⁹⁵に参る道也。右に行こと十余丁にして社頭に出る。いと大なるかたち也。箱崎八幡宮に参る。「本社戊亥の向二天門の額「敵国降伏」の前当座主真言宗其家知行三百石」むかし息長帯姫の命、八幡神を生給ひし時の胞依「そのかみ白幡四流、赤幡四流そらより降る。其処に松うゑて表とす。故八幡の名のありとなん」箱に納てここに埋め給ひし故、かく地の名にもおひけると也。(其箱につめし印の松今にあり。神さびたり。印にうゑし松今にあり。印の松とは云。石柵をただめぐらせり。縦令箱松といふ。)いと大なる御社也。二天門の額に「敵国降伏」の四の大文字を竖さまにうゑ付たり。(箱崎額延喜帝宸翰今に存也)「植字はよにめづらし」是は御母の尊。唐国(ふすま⁹⁶新羅)をうち給ひし時、今皇后始有胎。其子有獲させると撞賢木嚴之御竟天疎向半姫命たち神がかりし時の事によれるなるべし。(其あたりの松原いとおもしろし、いとよし。『拾遺集』「万代にかり伝へん箱崎の松の千とせの一よならねば」とよめりし也)『後撰集』行清「そのかみの人は残らじはこ崎の松ばかりこそ我をしるらめ」御社のあたりの松ばらある人十里松と名付て

集』に見えない。

94 「あるかて」は不審。

95 宇佐・石清水と共に日本の三大

八幡宮。元寇で焼失したが、建

治三(一二七七)年再建。

96 「ふすま」は不審。

97 「新羅」は不審。

98 「唐国」は不審。

99 「唐国」は不審。

いとめで、から歌作れりとなん。「松ばらの中に米市塚夫婦石といふあり」・「続古今」「ちはやぶる神よにうゑし箱崎の松は久しき印也けり」又、千よの松ばらといふ

参り終りてもと来し大道を半里戻。ただたどり、一石橋をわたれば、はかた也。「橋詰にぬれぎぬ塚⁹⁷⁾といふあり。田地の中にぬれぎぬ墓あり。いかなる人のつかなるを不知。されば、古歌にいつはりをいふことをぬれぎぬといふとなん。上なる米市塚夫婦石も同じ、後に遊ばん人くはしくたづね給へ」

(さて、石橋をわたればはかた也) 博多はむかし唐船の着し津なるよし、代々の記(ふみ・歌)にも多くみえ、唐の文にもしるせり。「後拾遺」に堀川百首に兼昌「うなばらやはかたの沖にかゝりたるもろこしふねの時つくる也」・「扶木集」⁹⁸⁾に国基「船出せしはかたはいづら対馬にはしらぬしらぎのふねぞみえける」むかしは唐船、筑前のはかた、肥前から津、又、泉州堺につきしよし旧史にみゆ。今は、ただ対馬と長崎のみ。其内対馬につくは、多く朝鮮船にして、長崎につくは本唐・阿蘭陀等也。又、薩摩へは琉球国舟つく。琉球ふねは薩摩侯領じ給へば、其ふねは勿論にて唐船もひそかにつくともいひ、又、琉球へ渡り琉球より其国の物として、さつまにわたすともいふ。いまだ、其虚実をしらず。「はかたは福岡と船町つづきにて、中島橋といふ橋一を隔つるのみ也。共に黒田侯の御城下也。「黒田侯の先君はいはゆる黒田如水侯也。高五拾五万石」黒田侯は、西海の大諸侯の中也。市井もにぎはしく、大臣士大夫の家など大にして(大阪城の如く)多し。中島橋のこなた紙屋孫六兵衛といふ逆旅にやどりぬ。先是二三年わが国人三宅文政といふもの筑紫に遊学し、はかたなる練屋九郎左衛門といふものの方に在とき、其友阿辺良平の書翰をもち行こととて、文政時にし筑後のくるめに遊びてあらず。あるじ夫婦篤実なる人とみえて、文政がことをもねもごろにいへり。

97) 「筑前名寄」にその由来が記述されている。場所は「博多の東、石堂江の川の辺、小池の内」とある。

98) 「夫木和歌抄」(ふぼくわかしょう。「夫木」は、日本国の意の「扶桑」の偏旁) 私撰類題和歌集、36巻。藤原長清撰、三一〇年(延慶三年)頃成立。

99) 「訪ねしに、」など想定し得る。

さて、むかし「二十余年前也」京都に遊学せし時、福岡の医岡部聰達といふものと軒をならべてやどり、共に文憲先生⁽¹⁾に学びしかば、誠に兄弟の如むつびしかば、わかれし時、国は千里をへだつともなごぢぎれりし。其後書やれどもかへりごとなし。道遠き故、書郵の失ひたるにや、いと覚束なくおもひをりし。此たび幸に其地を過ける故、案内者やとひて、先其医の師、鷹取碩庵⁽²⁾の庵にいたりとふ。「碩庵は黒田侯の医也。禄式百石」碩庵（をりふし外に出て）留守にて、其弟子某出あへり。聰達がことをとへば、十八年前に病死すといふ。予打驚き力をれて、もろともに手携はり、むかしへをものがたらんとおもひしに、

かくのみにありけるものをありしよのものもかたらんとおもひける哉
といひつつ涙ながら立帰る。

「福岡はいはゆる貝原篤信⁽³⁾、及、其子好古先生⁽⁴⁾のありし処也。又、当時（侯の儒官）亀井道載⁽⁵⁾、其子昱太郎⁽⁶⁾海内に名高し。又、其臣・其属臣細井判事⁽⁷⁾・田尻才兵衛⁽⁸⁾、国学和歌をよくすと也」

二十九日、博多をたちて、博多太宰府なるに趣く。天満宮に参る。（是ぞ此度の本御願なりければ心にいみゆまはる⁽⁹⁾。）其間凡四里ばかり。名所多し。長崎へ行には、天満宮へは三里ばかりまはり也。天満宮へ参るには、先、産八幡宮へ参り、まくこえといふをこえて天満宮に参るべし。道の順よし。先、はかたより三里にして水城といふあり。是『万葉集』に（第六卷に大伴卿）「ますらをとおもへる我や水くきの水城の上に涙のこはん」とよめりし処也。「『日本紀』天武天皇三年、筑紫に大なる堤を築て水をたたへしむ。是初め塞の為なるべし。堤は高さ四間・根は十五間・東西四百間とあり。今水はなけれど、堤のあとが岡の如くこ、かしこにのこれり。」

(1) 斎静斎（一七二九〜一七七八）儒者

(2) 『新訂黒田家譜』（第五卷）の安永七年（一七七八）に奥医師としての名前が見える。

(3) 貝原益軒（一六三〇〜一七一四）のこと。

(4) 貝原好古。益軒の甥。

(5) 亀井南冥（一七四三〜一八一四）。

(6) 『論語語由』などの著がある。

(7) 亀井昱太郎。昭陽（一七七三〜一八三六）。南冥の長子。『左

伝纘考』などの著がある。

(8) 黒田藩作事奉行。

(9) 梅翁ともいう。『梅の舎集』が

又、行こと暫して、関屋てふ地あり。蓋し古の関のあとか。

又、行こと暫して、朝倉関・木の丸関のあとあり。水城の関は、水城の大堤の東の山のきはの通ひ路にその跡あり。『未木集』に高遠「岩かきの水城の関にむれむかふうちの心もしらぬもろ人」

水ぐきのあとのかたみをかたらへる みづ城をみればなみだぐましも

「今、関屋といふ地なるべし」

又、南行ことしばらくして（道の右、川のあなたに、かるかや道心のつかあり。かるかや道心はもと太宰府の官人なりしよし）菟萱の関あとあり。「水城の堤の南にあたる。少し手前に長崎へ行道あり」今、道の左右に二株の松有。其しるべ也。又、関屋のあと、て松より少し南にあり。関守の居たりし也。『日本紀』天智天皇三年、筑紫に関守を置給ふよしみえたり。一説に天智天皇、筑紫に居給ひし時、行人「朝倉や木の丸殿にわがをれば名のりをしつっ行はたが子ぞ」とよみ給ひし所也ともいへり。「梁塵抄」奥義抄にみゆ。又、「本朝文粹」奥義抄には「行関也」とあり。「きの丸殿」ともあれば、関にはあらざるべし。「新後撰」祝部成伸「ほととぎす朝くら山の曙にとふ人もなきなのりすらしも」『新古今』第十八、菅家「かるかやの関守にのみみえつるは人もゆるさぬ道辺なりけり」其あと凡五町ばかりは、今も除地^⑧となりて田には作らず。大なる礎と瓦あとのみのこれり。瓦も往々あり。「其手前近、菟萱道心の墓といふあり。俗にいゆるかるかや道心のつか也といへど、いかおほづかなし」かるかや道心といへる浄るり本^⑩あり。それは此記をとりたる也。其こと考ふべし。按に、かるかや道心は、安元^⑪、保治^⑫あたりの人也。太宰府城の人なりしが、遁世して高野山にのほりし。

名にたかき天拝山、右のかた半里ばかりにみゆ。「堂のごときもの半腹山頂にみゆ。其ふもと

ある。

四月二十九日

(8) 齋^いみ齋^{ゆま}はる。けがれを避けて身を浄め慎む。齋戒する。

(9) じよち。朱印地、見捨地以外で、租税を免除された土地。

(10) 『菟萱桑門筑紫轅』並木宗輔ほか合作の時代物。一七三五年（享保二〇）初演。

ゆはらとて源泉あり」

又、行こと暫して都府楼のあとあり。即ち、太宰府也。都督府とも、西の都ともいへり。「筑前名寄」に太宰府のあとは、国分村の東、観音寺村の西に築山といふ小山あり。その西の田の中にあり。大礎多し。其北に都府楼のあとあり。南に大門のあとあり。「むかし都より官人を下し、九州二島を総掌て政を行はしめ、又、異賊の襲ひ来るに備へ給ふ。其官の上尊を太宰帥といふ。多くは親王任じ給ふ。権の帥は左遷の大臣あるは大納言任ず。次の官を大式・小式などいへり。されば、菅公は左遷の大臣にて此処にましましける也。今は皆蒼田となりて、ただ礎のみここかしこに残れり。「其礎いと大にして周郭一丈余あり。柱をすゑたる処、壹寸計ほりくほめたり。凡五十余あり」予感ふかくて

古の西の都のあととへば いしずゑのみぞしるべなりける

「土人は某は、御門のあと、某は、御殿のあと、某はみくりやのあと、などくはしく記せるよし。後に遊ばん人たづね給へ」其かたはらに月見の岡あり。小き山也。今はかたちくづれてあれはてたり。(是は『名寄』に、いはゆるつき山なるべし)

古の月見の岡みればきこりの 道もおほろなりけり

久かたの月見の岡は幸かれど 月みし人の行えしられず

などいひつつ行こと三四丁ばかり行けば(清水山普門院)観世音寺に至る。此寺むかしは天智天皇の御祈願所にて、いと壮麗なりしが、今は尋常に少し劣れるほどになりたりとぞ「重屋門の近をいれば堂あり。堂の中央に観音の大像あり。左右夜叉のごとく戈つきたる像有」これ『源氏ものがたり』には、「玉かづら」の巻にて、つくしの観世音寺の後なる清水しかくといへる処也。今も尚清水あり。安永五年(九月十八日、権大納言兼太宰権帥教閣「協書に滋野介公族等

(11) あんげん(一一七五～一一七七)

七)。平安末期、高倉天皇朝。

(12) すべつかさどりて。

(13) 一七七六年。江戸中期、後桃園

「謬」卿着し給へる碑文にあり。

寺を出て街道を行こと暫して、一小川あり。石橋わたせり。古歌にいはゆるおもひ川也。(太宰府天満宮の西山の城は高橋シャウ也。)[「名寄」に云「おもひ川は、今の太宰府の西にながるる川也。ほたるをよむ。其蛸他所よりは大也。』後撰集』の古歌、伊勢「おもひ川たえずながるる水の沫のうたかた人にあはで消めや」、『新勅撰』第十一皇嘉門院別当「おもひ川岩まにとよむ水ぐきをかきながすにも袖はぬれけり」、山吹の花にせかる、思ひ川色の千入は下に染つ」、『古今六帖』貫之「ながれてもたえじとぞおもふ思川いづれかふかき心なりける」、『新後撰』信家「ふけゆけば同じ蛸のおもひ川ひとりはおもひ川ながれ入。染川は『伊せものがたり』に「染川をわたらん人のいかでかは色になるてふことのなからん」とよめりし川也。石ふみ川は、天満宮の西にある川也。万代為頼「海山を夕こえくればみかさなるいしふみ川にこまなづむ也」『後撰』藤原真忠女のもとへつかはしける。「つくしなるおもひ染川わたりなば水やまさらんよどむ時なく」かへし「わたりてはあだになるてふ染川の心つくしになりもこそすれ」

いかにして心つくしにおもひ川 色に染川わたり初けん

わぎもこにあひ初川をわたりては おもひ川風吹もそふなり

又、行こと暫して、市井あり。「農商をかねたり」市井を行こと暫して、大なる銅の鳥居也。

即ち天満宮の境内也。寛済かねてより此神を崇仰けるが、先つ年まがこと(14)にあひし時、いのりてしるしあり。浦の坊の僧にいひかよひしことありければ、鳥居より左りして浦の坊に至る。あるじの僧京都へ(任官のため)のほりなしにて、其弟の僧出むかへてくれ、ねもごろにあるじす。(とかくする内)、日くれければ参詣は、明日のことにこそといひていねぬ。

天 皇 朝。

(14) あがめあおぎける。

(15) 禍事。わざわい。よくないこと。凶事。

(16) 「のぼるよしにて」か。

後の四月朔朝に手あらひ口すすぎて、天満宮にまゐつ（坊のあるじみちびけり）。きのふみし大鳥居のあたりより大路をゆけば、左に一殿あり。浮殿とかきたる額をかく。是御祭の時（御幸）。「二月二十五日・八月二十五日也」御輿をしばし休め奉る処也。さて行ば、又、大なる鳥居あり。鳥居を入ば、いと広き池あり。池に三の橋わたせり。第一、第三はそり橋也。撰津住吉のごとし。第二の橋はよのつねに同じ。いづれも五六丈ばかり、はしをわたりて□□ばかりして本社あり。南に向へり。凡、方十間ばかり、奥の方三区にわかち簾かけり。中央は天満宮、左右はいと奇麗也。もろ人の奉れる扁額などは数多して、記すにいとまあらず。「其中云「聖徳配天享蘋芸於万世千里又飛梅一夜生松万百代増緑」などいへるあり」（菅家「東風ふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」）宮の軒端にはゆる飛梅あり。そのかみのは、かれかたになりて今は其子はへ生さかへり。むかし此宮、改造りし時、梅の元の木はらざおりつるに、一夜の雲俄に湧しといへり（『金葉集』安楽寺にて「神がきに昔わがみし梅の花ともに老木となりける哉」『新古今』梅をりくる人の夢に「をしみなくをる人つらしわがやどのあるじわすれぬ梅のたちえを」『都より心つくしに飛てこし二染の梅の香こそしるけれ」）。「幸のはし、」天神の御旅所、桜の木寺へ行所の溝にわたせる橋なりといひ伝ふ。「夫木集」大式高遠「たのもしき名にもある哉道ゆかば先さいはひの橋をわたらん」予かねておもひけらくちはやぶる神よの神くはさらにといはず。中昔よりこのかたはただ（処の道には）此御神と（南前道には）楠廷尉（あながちに）とのみふかくたふとめるまにく、（とふとびまつれりしかば）すでに楠廷の像をつくり（又、よりありがたき神はあらじと）むかし楠廷尉の像は已に作り終りぬ。其御像（御像）を作らまくほりしけるが、貝原篤信氏の著述『天満宮御伝記』いとつまびらかに書のせられたれば、筆さし置ぬ。今、御座前にぬかづきてま

閏四月一日

(17) 寛政十二年（一八〇〇）は四月

と閏四月とがあつた。

(18) 「まうづ」か。

(19) この一文不審。

(20) 「御伝記」か。

るなどおもひ出てよめる。

己が国の聖とあふぐ神なれや 道のたつきを（しるし）をしへ給はね
又、寛済にかはりてよみて奉れる。

天満の神尊の穴 かけまくもゆゆしきかも いはまくもあやにかしこき 天満の神の尊の
うつそみのよにます時に 久かたの月のかつらも をるばかり御家の風を
ふきそへて雲るの上に 天の下の大政 いや高にとらし給へば 千万の青人くさも

打なびき露の恵を いとさはにかかふりにけり（る時に） さやけき内に村雲の
かゝれるが如見し さかふ花あらしの吹そひ（すさび） 然どもさかしら人の
ことのはの千重につもりて しらぬひのつくしのくにに 天ざかりさすらひませり（して）

然ども身のうきことは いさ、けもおほしも出ず 天皇の御事ゆかしみ
あかくきよくなほき心を あし曳の山にのぼりて すがのねのねもころくに
天（地の）つ神にことあけしつ ねもころにしいのり給へば
御身こそは（さても）神さりませり 御名は世にいや遠長に 御稜威さへ朝日の豊さか

のぼる如てりかがやけば かしこげど神のむかしを 倭文手環くりかへしつ
おもふなりやすからなくに なげく空わが身におへる 罪咎罪なき身にし
打おほふ（ひし）八十まがごとを 朝風の朝のみ霧 夕風の夕御霧 残りなくあらせ給へと

村ぎもの心をいたみ ぬえこ鳥うらなきしつ つ ひたぶるに（のみにし）いのりしかひの
ありそ海ふかき恵を 露ばかり御かへりせんと 八重の山八重のしほちを
なづさひて来し心しらすな

かへしうた、寛済

(21) 「まるなど」は不審。

(22) 懸けまく・掛けまく。言葉に出して言うこと。

(23) 忌々しき（「忌々し」）。恐れ多くて、はばかられる。

(24) 青人草。民。民草。人民。国民。

(25) 被り（「被る」）かぶる。こうむる。身に受ける。

(26) 「さやけき内に吹そひ（すさび）」は不審。

(27) 賢しら人。差し出がましい人。利口ぶった人。

(28) 聊け。少しばかり。わずか。

(29) みいつ。「いつ」の尊敬語。天皇・神などの御威光。

(30) 群肝の。「こころ」にかかる枕詞。

さかしらにかゝれる罪の八重雲を　ふきはらひてし天つ神風

宮の左右前後（後はいかが）いと長々しき廻廊・末社多し。楽舞台・真願所もあり。其祭を掌れる寺僧社人いと多し。其最尊きを大鳥居の座主といふ。社人は伊予・加賀・但馬・其外五十八坊あり。（あるじをせる浦の坊も其一也）僧の内肉食妻帯もあり。しからざるもあり。肉食妻帯は多く神の御子孫または、神の御家臣の裔也。（神の御末は）御祭の時、御幸の御供に牛車にのる。御祭は二月二十五日・八月二十五日也。「八月二十二日晚御幸、二十三日巳刻津南迄帰り候。二十四日御宮移法」

其外、此外御神のよろずのこと貝原先生のあらはせる『天満宮御伝記』にくはしければはぶく也。四つ時過るころ路浦の坊へ帰り、飯などくらひて、又、そこらめぐりありけり。天拝山に（を遙にみさけて）

よの常の山とや見らん天満の　神のむかしをおもひしらずは

天拝山は天満宮の一里半ばかりにあり。むかし天満神、天神いのり給ひし処也とぞ。山頂と聞ゆるに社みゆると。「天満宮より一里半計」のほらまくほりけれど、さはることありてはたさず。故里人にあつらへたること梅の御守十ばかりこひえて帰ぬ。是は、神の御前なる梅の花を一花づ、包たればいふ。御文庫には、神の御真筆をはじめ、からのやまとの名筆もろくのたから物ありとききて、こひ拝まばやとおもひけれど、またさはることありてやみぬ。「はかたより三里、産八幡宮へ参り、産八幡宮より、二里、天満宮へ参るべし。順道也」梅の御守十ばかりこひてもち帰りぬ。是は友どちのあつらへしまま（によりて也）十ばかり「此御守は、神前の梅の花を包みたる也。一人に一つならでは得べからずとききしが、左にはあらず。銀一両づ、也」

(31) 鷓子鳥（鷓鳥の）。「うらな

く」にかかる枕詞。

(32) 水にただよう。

(33) 「故里人の」か。

其東南、一二里ばかりに竈門山（宝満山）あり。いと高し。別の名は、宝満山（又の名、三笠山）。山上に石門のかまどのごとくなるあり。よりてかまどやまと名くと也。又の名は、三笠山。かまど山其東南一里ばかりにみゆ

かまど山けぶりうちふり立そひて あやめもわかぬ五月雨の空

『名寄』に大江匡房が「かまど山またよをこめてふりつるみねの白雪明てこそみめ」。『現存集』に道位法師「ちるたびにもえこがれてもおしき哉かまど山なるひざくらの花」。元輔「春はもえ秋はこがるるかまど山霞も霧もけふりとぞみる」。『六帖』「都より西にあるてふかまど山けぶりたえせぬこひもする哉」。又、三笠山ともいふ。「『現存集』頼依に松垣の姫「ふらばふれ御笠の山し近ければみのしまはさして行てん」。山上に玉依姫の帯しめ有。国の中央にありて国土をしづめ給ふ故、此国の鎮守とあがめ祭ると也。『続古今』藤原経衡「雨ふれどいゆるしのみえたらば水かがみとおもふべきかは」。此時奉りし説文とあり。予上らまくほりけれどさはることのありければ

大君の三笠の山をさしてゆかは 天のみかげをかかふらんもの

（以下、次号に掲載予定）

(34) 被ら（被る）。お蔭をこうむる。

**Tsukushi Diary (Volume I of a book of travels
written in the Edo period by Koushu Kikuchi)**

Terumi Matsubara

Masafumi Igawa

Abstract

The writer tells in the book about historic events and comments on them while visiting scenic spots and places of historic interest in Hiroshima, Yamaguchi, Fukuoka, Saga, and Nagasaki.

Only the first volume is preserved in the Seto Inland Historic, Folk Museum in Kagawa Prefecture.

This is an introduction to Volume I , a reproduction of the original text with annotated notes.

高松大学紀要

第 31 号

平成11年 3月15日 印刷

平成11年 3月19日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064